

從 地 涌 出

——法華經神話の世界——

高 橋 堯 昭

法華經は、実にユニークな經典である。そして、その教義を表現する為に、数多くのドラマティックな場面がある。例えば、白毫相や長く出した舌根から光が出たり、大地が割れて宝塔や、黄金色の菩薩達が涌現したりする。それぞれ法華經の重要な思想を表現する為のものである。「光」の問題については、私は再三諸誌で論及して来たから、今回は「地涌」について考えてみたい。共に数多くのガンダーラ探訪の際、人影絶えたタレリー・ジャマールガリ・メハサンダ等の仏塔前や、僧院趾に坐り込み、又、レストハウスの粗末なベットに寝て、天井のヤモリを眺めつつ考えた幾つかの可能性を、ここに「試論」として示し、先学の批判と、アドバイスを仰ぐものである。



釈尊が出家を決意して宮殿を出る時、愛馬カンタカの「蹄」の音で警護の人が目をさまし、出城を妨げられることがあってはと、四天王や、夜叉が馬の足を支えたとある。

即ち、經典には次の如き表現がある。

- 1、四天王捧承馬足、梵王帝釈開示宝路（方广大莊嚴經出家品大正3―五七五下）
- 2、無量乾闥婆衆衆鳩槃荼衆諸龍夜叉…速行莫往上虛空中（仏本行集經第十七捨官出家品大正3―七三二下―七三三上）

從地涌出（高橋）

從地涌出（高橋）

3、天帝毘沙門天王而在前進…本性明冥悉以空虛（普曜經第四出家品第十二大正3—五〇七中）

4、すると夜叉たちはお辞儀をして身体をかめながら、その下腕を金の腕環で飾りあげた蓮華のような手の先を（悦びに）震わせながら差し出して、その手で駿馬の蓮花のような（四つの）蹄を（大地につかぬよう）持ちあげた（ブッダチャリター大乗仏典13原実訳）

5、四神來捧足、潛密寂無声（仏所行讚出城品第五大正4—一〇中）

6、四神接捧足、命脚不著地…諸天鬼神祝梵四天、皆衆導從、蓋於虛空（修業本起經出家品第五大正3—四六八上）
7、四種鬼神欲令速疾接捧馬足甚使精良、四王躬自在前而導（仏本行經出家品第十一大正4—六八下）

以上の經典の叙述のように、「四天王や無量乾闥婆衆鳩槃荼衆、又無量百千の諸夜叉」が、カンタカの足をもちあげて虚空中を行くとあるが、私が注目したいのは、ガンダーラをはじめA・D三、四世紀の彫刻中のこの場面である。特に、写真1の彫刻中の四天、及び夜叉は「大地から半身を出して」馬の足をかつき、又、捧げ持っている。これは他の人物とのつり合い、馬を余り高



1 四天夜叉が捧げる（ナガールジュナコンダ出土）

くしないという絵画的な見地からそう言ったと言えないこともないが、私はもっと別な重大な視点がかくされているように思える。

私はかつて「ハリティとバンティカ」をとりあげたことがあったが、ハリティもバンティカも、もともとはベルシヤ系の神で、仏教がガンダーラで異文化と接触した際、これらの神々を、自己の中に包摂して行ったもの。ハリティはベルシヤの地母神、大地の神、豊穡の神なるが故に、仏教神話にとり入れられても、五百人とか、千人の子供を産むという本来の生産の神の性格をのぞかせている。ガンダーラの彫刻では、子供だけではなく、豊穡の角を抱いている像が多く出土している。又、バンティカも、毘沙門天王の眷族にくり入れられたとあるが、毘沙門天王自体、天部の神に位置されているが、クベラの王なるが故に、もともとは大地の神、豊穡の神であった。

この毘沙門天等の四天、及び夜叉が、半身を大地から覗かせている所に見逃せない重大事があるのではなからうか。



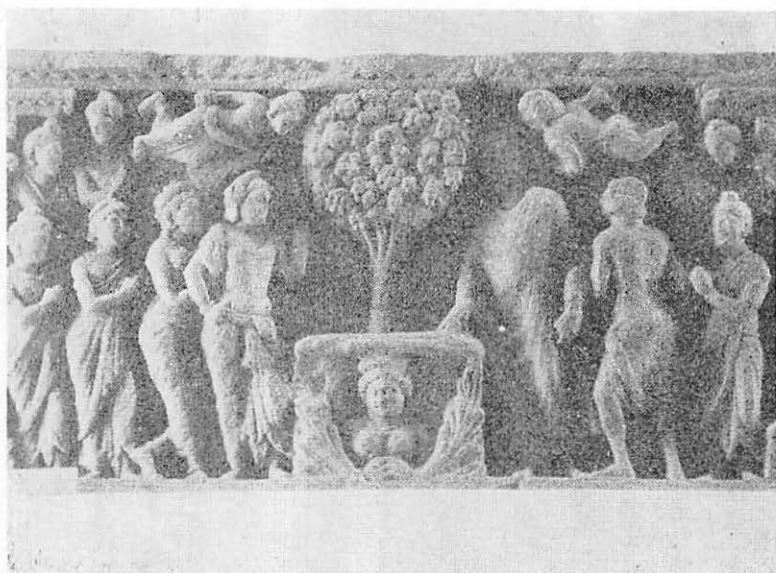
さて、いよいよ釈尊が悟りに近づき、菩提樹の下に近づく、所謂「菩提樹下得道」の場面では、二つの問題がある。一は樹神が歓迎する場面と、二は地神が涌现して、大地震動させ、悪魔を退散させる場面である。

写真2は樹神、即ち木の精が喜んで釈尊を迎える場面である（カルカッタ博物館蔵参照）。

「於是樹神、觀其威神、即懷恐懼、承仏威力、所言至誠、悉共同和、以十六事、嗟歎菩薩」（普曜經降魔品第十八 大正3—五一九下）
この樹神は、やはり生命力の表現であって、2の地神の一種とも考えられよう。

然して釈尊が悟りに入る時、これを妨げるマーラの誘惑をしりぞける為、釈尊は大地に右手の指を触れられる。

從地涌出（高橋）



2 樹 神

即ち、触地印をして、地神の助けをかりる。大地が六種に震動して、悪魔が退散する「降魔成道」のガンダーラ、アマラパティ、そしてナガルジュナコンダの彫刻の場面は注目されよう。

即ち、釈尊の触地印の前に、悪魔がころろと転倒したり、豊満でコケティッシュな女達が、あわてふためいて逃げ行く彫刻は、全世界の博物館や、コレクションに見られる所である。これらは次の原典の表現であろう。

1、菩薩徐挙右手以指大地……爾時地神……於菩薩前從地涌出……白菩薩言、我為証明菩薩往昔於無量劫修習聖道今得成仏。然我此地金剛之寶。余方悉転此地不動。作是語時三千大千世界六種震（方広莊嚴經降魔品第二十一 大正3—五九四下）

2、右手指於大地……爾時菩薩手指此地……是時此地所負地神以諸珍寶而自莊校……從於地下勿然湧出、示現半身……是時其地遍及三千大千世界六種震動（仏本行集經第二十九魔怖菩薩品下 大正3—七九一上）

3、菩薩即以智慧力、伸手按地足知我応時普地轟大動魔与官風顛倒墮魔王敗績悞失利、惛迷却踞前尽地（普曜經降魔品第十八 大正3—五二一中）

4、大地を支え、ひたすら善業・功德の道に進んでいた竜たちは、この偉大なる聖者に障礙がふりかかるのを（見て）耐えきれず、マールに対して憤怒の眼をむき、シュウシュウと音をたてては、そのとぐろを解いては身をひらいた（ブッタチャリタ、大乗仏典13、原実訳）

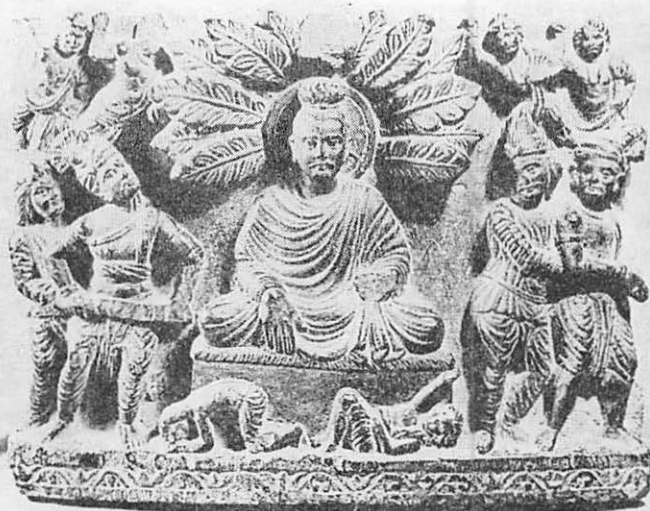
5、仏所行讀には、ブッダチャリタの地に手をふれる所に相当する所なし。但し、怨党悉摧碎、衆魔退散の所はある。

6、菩薩即以知慧力、申手按地是知我 応時普地輕大動 魔与官属顛倒墮、魔王敗績悵失利 昏迷却踞前尽地（修業本起經出家品第五 大正3—四七一—中）

7、告魔王已手触地 我行汝知地逮証 於是地神出現形 大拳声我証我證……三千世界六返動……顛倒偃覆墮地（仏本行經降魔品第十六—大正4—七八—中）

この引用の經典の中で、方広莊嚴經と、仏本行集經では「地神の涌出」ということがある。この二品は、ラリタヴィストラの異訳といわれ、大体同じ内容である。即ち、「地神が涌出して、この菩薩は古来より修業して来たが、今悟りに入ると証明し、併せて、この菩提樹下は宇宙の中心であると宣言し、大地を震動させると、惡魔

從地涌出（高橋）



3 触地印（ペンシャワル博物館蔵）

從地涌出（高橋）

は驚いて退散する」とある。即ち、釈尊の悟りに対して地神の援助・協力が密接に関連している。

然し、他の教典には、地神の涌出の表現はないが、釈尊が「大地に指をふれると、大地が震動する」ということでは共通しているから、この地の底にいる神の存在は既に前提されているといつてよい。従つて前述の如く、釈尊の悟りという重大事件に際し、「地神」が大きな役割をなしていると言えよう。

かつて、私は、ヒンズー教の発達史を考えたこともあるが、ヒンズー教が大いに発展する基盤には、ビハール州とか、ベンガル州の地母神信仰があり、これがシバ派のカーリーとか、ドルガの両女神⁽²⁾の発展をうながしたことに注目したが、仏教も又、インドの大地から生れた宗教なるが故に、經典でいう「地神」、即ち大地の神の信仰を無視することは出来ないと思はれる。

この地の神を表現するガンダーラの彫刻は、これ又多い。特に、写真4のラホール博物館所蔵の仏像（上体が



4 地母神

なく足だけ」の足もとに、「大地から半身を出している男女の二体の像」がそれである。

前述の諸経典の地神は、現代では地母神という。いわゆる大地の神・豊穰の神のことである。洋の東西を問わず、何千年の昔から地母神信仰は、否むしろ人類の歴史と共にあるとも言えよう。メソポタミヤや、シリヤの、目の大きい、胸や腰の線の豊かな、泥や石製の地母神の像がそれである。人間が如何に大地の恵みと密接な関連をもつて生きて来たかを示している。然も、メソポタミヤのものと非常によく似た地母神像が、静岡市の登呂遺跡から出土しているから、これ又、人類の思考の普遍性類

似性に驚く。

仏教の神としてとり入れられた鬼子母神も、もともとは、ペルシャの地母神であったことは前述した。彼女がもつザクロは、砂漠地帯の果物であり、その種は、内に何万と包まれている。まさに豊穰そのものを表しているよう。豊穣といえど彼女の持つコルヌコピヤ、即ち切口から木の芽が萌え出ている動物の角、これこそ生命力、生産力以外の何ものでもない。



5 ハリティーとパンティカ (ペシャワール博物館)



6 双神変像（パリ、ギメ博物館）

バクトリヤ・サカ・パルタイ、そしてクシヤンと、異邦人の侵入統治によって、ペーダ以来のカースト制度が乱れ、実力のあるものが社会の上位につく風潮が、クシヤンの世界で起った。社会の下位に甘んじていた農民は、その生産力によって、又商人も、シルクロードの通商によって、巨利を得れば、社会の上層に行く。この為、生産の神ハリティーと、財宝の神バンティカの信仰が仏像成立前、西紀後・二世紀に爆発的に信仰されたことが、無数に残るハリティーとバンティカ像によって知られる。写真5は、仏教的脚色を経た鬼子母神話以前のものである。即ちハリ

ティーは、「コルスコピヤ」をもち、バンティカは、大きな「財布」をにぎっている。これと同じものが、パリーのギメ博物館蔵の「Paitava」出土の、仏の超能力・大慈悲を示す双神変像（肩から火を出し、足もとから水を出す像）の両側に如実に彫られている。⁽⁵⁾

（矢印のところ。これで当時の人々の願望が推測されると私は考える）

然して、この二神は、もともと大地の神である所が問題である。そもそも、この大地の神は生産の神であるとともに、再生への願いの神だ。秋、万物が葉を落し、冬の干枯の寒風の中で枯れたようになっていた枝から、春になると、又みどりの葉がすすくすくと芽生え美しい花がひらく。この生命の復活再生、即ち生命の永続性を司る神が、この地母神だ。

写真2で示される、カルカタ博物館蔵の、菩提樹下の宝座の下にうずくまる樹神の像には、「生命の再生を意味するギリシャのアーカンサスの葉」までついているのは、この生命の永続性・復活再生を地母神が表現していることの証明だと思う。



話を仏教外の典籍にむけよう。その起源は、ペーダ時代までさかのぼると、インド人の自負するラマヤーナが問題となる。ラマヤーナは、マハバーラタと並んで、インドの二大古典である。マハバーラタは、デリーを流れるヤムナと、インダス河との間のパンジャブ地方がその物語の舞台だといわれ、その中のバカバッターギーターに、法華経に対応するものがあると言われているから、ガンダーラに近い所の成立と考えられている。又、ラマヤーナも、同じく西北インドのサンスクリット文学復興の気運に乗って篇纂された。然も、大乘仏教教典編纂も、この一連の運動と考えられるから、我が法華経と無縁な存在ではなからう。

このラマヤーナの主役は、勿論ラーマで、現在インドでヴィシュヌの化身として、一番人気のある神であり、その夫人が、又インド人の敬愛おく能わざる女神シーターだ。

シーターとは、「種まきの穴から生れたもの」という意味で、原始人は、石の棒で大地に穴をあけて、その中に種

をまいて行った。この穴から生れた子、即ち大地の子である。「或る日、犠牲のために、大地を耕していると、種まき穴に一人の女の子を発見。それをひろい、シーターと名付けた。大地から生れた子は私の娘として、我が家で成長した」と。この娘が成長して、ラーマの神妃となった。

然し、彼女の生涯は、平坦なものではなかった。セイロンの悪王ラバナに略奪され、長い間セイロン王のハレムで過した。シーターは悪王の誘惑にもめげず、貞節を通した。ラーマは苦心の末、猿王（これ又神）の助けをかりて、シーターをとりもどした。このインドへの凱旋を祝うのが、秋の火祭ディワリーである。「イン・パ戦争が五回も出来る」とインド人が自嘲気味に語る程、大量の火薬を使って、花火を打ちあげて祝う、熱狂的な祭である。それ程、インド民衆に敬愛されるラーマとシーターの二神である。然し、シーターをとり返したラーマは、余りにもセイロンの滞在が長かったので、その「貞操」について疑念をいだいた。これを感じたシーターは、「私は火の穴にとび込む。もし貞節なら、体は焼かれまいであろうと。この時、火の神アグニは、シーターを火の中からかえ出した。然し、シーターは全然焼けていなかった」。為に夫ラーマの疑念はとけた。

ラーマと共にインドに帰ったシーターには、未だ試練が残っていた。然も、この部分は、五世紀のグプタ時代に書き足されたといわれて、今問題とする法華經の成立史、特に「宝塔や菩薩の地涌」の問題とは、直接関係があるとは考えられない。然し逆に、そのような物語りが書き足されねばならなかった所に、シーターの性格が如実に表されていると、私は考える。

即ち、話は次の如くである。「シーターはインドに帰ったが、夫ラーマは信じてくれたが、やはり、まわりがうるさい。その貞節を疑って。そこでシーターは、『母なる大地の神よ、大地を割って、その中に私を入れて下さい』と

三度祈ると、大地がさけ地底より立派な玉座が現れた。そして（その上に坐る）大地の神は、シーターをいだいて下に消えて行った」とある。¹⁰⁾

大地から生れたシーターは、又大地に帰って行った。このように、インド最大の叙事詩ラマヤナは、地母神信仰をぬぎにしては考えられない。否、インド文化全体が、この地母神信仰を土台としていっているといっても過言ではない。従って、インドの大地から生れた仏教教典も、このような地母神的信仰がその底に生きているといえよう。

仏教教典は、単なる観念の世界の所産ではなく、現実の血と肉をもった人間の中から生れている。大地に根をはって生きる人間の思想である。従って、現実生活に生きる一般民衆は、この教典の中に生きる力を得る。即ち、農耕にたずさわるものは、その生産を高め、又、シルクロードの通商に従事するものは、その商売を通じて利益を得、豊かな生活をしたいという点に主点を置く。又、一度しかないこの生命も、現世に永らえ、来世に幸福を、否々、永遠に生命を得たいという悲願をいだく。これは現在残されている仏塔への奉獻銘が、如実にこれを証明している。¹¹⁾

即ち、仏塔や僧院を供養した人が、悟りとか涅槃という観念的な希望ではなく、「父母への孝養、一族の現世と来世への多幸、そして無病息災」という、ごく素朴な願いであった。要するに、この現実世界の平安と、豊かさへの願いであったことを考えると、私は、この地母神信仰と、共通の地盤に立っていることは見逃すことは出来ない。然も、出家の立場は、これらの欲望を捨て、ニルバーナ・心の平安を求める高度な立場であることは勿論であるが。



このようなインド本来の地母神信仰に加えて、西アジア・ペルシャ等の地母神信仰のガンダーラ地方への流入という事実もものがしてはならない。

從地涌出（高橋）

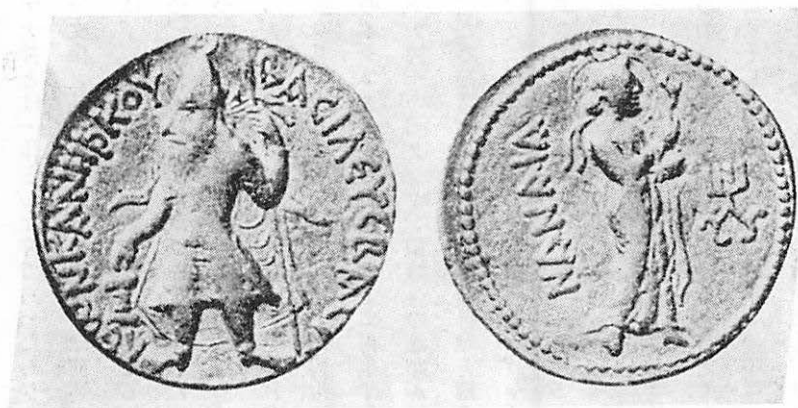
ガンダーラ地方は、もともとアケメネス・ベルシャの領地であつた。ベルシャのダリュース大王のギリシャ遠征に、ガンダーラの兵が加わり、又、ベルポリスにガンダーラからの朝貢図が彫られている。

やがて、アレキサンダー大王によってベルシャが減じ、大王もすぐ亡くなり、ガンダーラの地は、セレウコス朝ギリシャの支配に入るが、すぐ又これから独立した、ギリシャ人の王国バクトリアの支配に入る。以来、ベルシャ系のサカやバルタイ、そしてクシヤンの異民族の支配は続く。従つて、インド人による、この地の支配は、マウリヤ朝、特にアシヨカ王のほんの短い期間だけであつた所が、注意されねばならない。たしかに、その住民は、インド系のものが多くいたのだが、支配者はこれら外来民族であつた。

そこに住む住民の多様性を示すものとして、カニシカ王のコインにミントされた神が三十数種⁽¹²⁾もあつた。クシヤンの王朝は、このような多民族多種族をとりまとめる為に、それらの人々の信仰する神々をコインにミントした。そして、クシヤンの王は、ベルシャの伝統に従つて、「王權神授」⁽¹³⁾の考え方をもち、これを政治的に利用した。例えば、インド系の種族に対しては、「シバ神の委託をうけて政治を行うもの」として、インド系住民の甘心をかい、これを懐柔する政策をとつた。これらの神々が、三十有余あつたというのは、それらの民族を、大クシヤンの中に包括する帝王の道でもあつた。（コインの裏面の諸神がリボンをもっている。表面の王に神授する為に）

更に、もう一つ注目すべきは、そこに住む住民サイドでは、「一つの像」を、それぞれの民族で、自分の立場から自分の神として解釈し、信仰する融通性をもつたことが、ガンダーラをはじめとするこのクシヤン領域の特徴である。これありてこそ、あれだけの多民族を、一つの国として統一出来た原因でもあろう。

例えば、カニシカのコインにミントされたギリシャ系のナナ神は、ベルシャの水の神アナーヒターとして、又、イ



7 ナナ神のコイン（ローセンフィールド Dynastic Art of Kushanより）

ンド系ではこれを観音として信仰された等である。
この考え方はサカ・バルタイ時代に、ギリシャの神ゼウス・ヘラクレス・ニケーの神像がミントされたが、ペルシャ系の人々にはゼウスをアフラマズダとし、又、ヘラクレスはペルシャの戦いの神・不死の神として信仰されていた伝統による。

このような寛容性と普遍性とは、この地域に育っていた。これがあるが故に、大乘仏教、ひいては法華經の普遍性が成立するのである。そして又、このあらゆる民族種族が、それぞれの立場を認め、その信仰の自由を認め合う精神的風土が、インターナショナルなシルクロード沿いという特殊性によって育てられていた為、あらゆる神々の像が、コインの中に鑄造され、流布して行った。

然も、この通用された多くのコインの中で、特筆すべきは Nana 神のコインである。これは同類の Nanaia, Shaonan, Nanashao 等、一番種類も多く、又、数も多く、鑄造流通していた。

然らば、ナナ神とは一体どんな神であつたろうか。これはもともしリヤの地母神であつたものだが、メソポタミヤでギリシヤ文化と結びつき、ペルシヤでは前述の如く、水の神アナーヒターと結びつきガンダーラに入つて来た。

その神話は、「夫タンズム（穀霊）が亡くなると、その妻（地母神）が黄泉の国に迎えに行く。七つの門を通つて行くと、その、それぞれの門には鉄棒をにぎった鬼の番兵がいて、イヤリング・ネックレスをはじめ、装身具から衣類を一つ一つはぎとつて行く。最後には裸になつて、夫の所へ。そして、抱擁によつて、夫に生氣を与え、生命を回復させ、その夫（夫は今度は子供になる）をつれて、又一つ一つの門を通つて帰る。その時、各門では、はぎとられた衣類やら装身具を返してもらつて、地上に再生する⁽¹⁶⁾」という神話である。写真4に示された男女二神の涌出図は、或いは、このイシュタルの神話の地上に再生する地母神と、夫の二人を表現したものではなからうか。もしそうなら、この「ナナ神」の、クシヤン領域への流布が示されているように私は考える。

とにかく、この神話は、地中海沿岸の自然と結びつき、その春を象徴している。即ち、秋、すべての植物は葉を落とし、或いは、麦は刈りとられて一生を終える。かくて冬の厳寒には、じっと耐えて行くその枯木も春が来ると、又、みどりが芽ぶき、美しい花が咲く。又、こぼれて大地に埋れた麦の種は、芽を出す。生命の再生、生命は一回性ではなく、永遠に続くものとしての表現である。この神話は、ユダヤ教の「すぎこし」の祭として、又、キリスト教の「復活祭」として、引き継がれて行く。共に両者が、万物が生命を得る春先に行われ、春をことごとく祭であることは、この間の消息を雄弁に物語つていえると言えよう。この「再生・復活」の神が、ペルシヤを通じて、ガンダーラに伝わつて来た。そして、カニシカのコインの中にミントされている。これは、この「生命の永遠性・死復活」の神の思想が伝わつていたことを示している。然も、ラマヤーナ神話で示されている、インドの地母神信仰という土壌の上

に、この西アジア産の地母神が加わって、特殊な「大地の神」の信仰が作り出されて行ったものと思われる。

大乗仏教、特に法華經に於ては、仏の壽命は長久であり、久遠である。その入滅は仮りの姿であつて、本質的には無窮である。インドの釈尊もその久遠の生命の一つの化身、即ち応身に過ぎない。大地から宝塔が涌现し、又、黄金の本化の弟子の出現も、この「壽命長久」の説明のための神話である。この為、どうしても一旦は大地にもぐりながら、「大地から」復活し、即ち「すべての生命のもとたる大地」から涌现しなければならぬ。

法華經の成立がカニシカ時代であるか、それ以前であるかは、未だに定かではない。學者によつては、相當の隔りがある。概して最近是比较的おそく、特に宝塔品や、壽量品のある布施博士の言う第二類の成立はカニシカ時代に比定している。従つて、もし、この部分の成立が、カニシカ時代ならば、当然、教典作者といわれるインテリは、當時通用していたコインのナナ神の神話を、当然知っていなければならず、これからそのヒントを得たことは考えられる。

然して、この地涌の部分の成立が、カニシカ以前でも、これらがヒントになったという主張は、十分に該当すると思ふ。なぜなら、カニシカのコインに採用されたということは、それ以前にこの信仰が、この地方にひろがつていればこそと言えるからである。前述の如く、これらの神と神話は、ギリシャやベルシャ系の人々によつて、西アジアからこの地にもたらされたものだからである。要は、西アジアの地母神信仰が、インドの地母神と結びつき、このように「生命の久遠性」を示す為、「大地から」涌现する物語となつたものと、私は考える。



更に、方広大莊嚴經の「然我此地金剛之齊、余方悉轉此地不動」に興味をおぼえる。即ち、菩提樹のある所は宇宙

從地涌出（高橋）

の中心、地球の核にまで連なる万物の生命の源、そして、ここから地母神は出現する。この考え方は、ミトラス教とも似ている。クシヤン族の本拠地たるバクトリヤで起り、ローマ時代に隆盛を極めたミトラス教の教会は、洞窟を示す如き半地下式、中心に大小二ヶの石柱が建てられている。小は童子のミトラスの誕生する所、大は死すべき成人ミトラスの大地の底に帰る所。⁽¹⁷⁾かく我々を支える大地の奥深く生命の源があり、そこから我々の生命が与えられると信ぜられた。これは今迄述べて来た地母神信仰そのものに外ならない。

これはミトラス教のみではなく、広く西アジア全域にひろがっていた考え方である。回教の本山・メッカのカーバ神殿も聖なる岩で大地の底に連なる。同様な考え方は枚挙に遑ない。エジプトのオベリスクにはじまり、イスラムのミナレットも同じ発想であり、ギリシャのアテネのバルテノン神殿、バルナッソス山のデルボイのアポロン神殿も巨大な岩山の上にあり、又、ベルセポリスの北方ナクシェ・ルスタムの突出した岩盤「サンゲ・アープ（水の岩）」の上に、ダリユース大王等の墓が作られている。これらの大岩は、皆大地の底につながるといふ同一の思考方法であり、これらが西アジアから中央アジアまで広がって居たことに注意を向けなくてはならぬ。

玄奘は、ガヤの金剛宝座が大地から出現したと記し、又、スワットに「石塔」⁽¹⁸⁾が涌出したと言っている。先年、これを尋ねたが、たしかに大地に突きささった石柱のような石塔であった。

又、同じく、大唐西域記に、カニシカ王が大塔を作りはじめると、四隅から小塔が涌出した。これを覆うべく、大塔を建て増すと、覆えば覆う程、四隅の小塔は涌出して、為に巨大なストゥーパになってしまったとある。⁽¹⁹⁾

玄奘の記録からみると、經典に示されたガヤは別として、ペシヤワルからスワットにかけて、「大地涌現」の思想が流布定着していたことがわかる。丁度この辺一帯が、ナナのコイン分布の一番多い所であるからして、私は何らか

の関係はあったのであらうと思う。



かく考察して来ると、釈尊出城の馬の「蹄」を支える四天夜叉が、大地から半身を出し、悟りが近づくと、菩提樹の木の精が、釈尊を喜び迎え、又、マールが悟りに入るを妨げると、地神が大地から涌现して、大地震を起して退散させる等、釈尊の重大事には「大地」との深いかかわりが示されている。且つ又、この「大地」は、生命の再生・永遠性の源泉なるが故に、法華経の宝塔や、黄金の菩薩の「涌现」という神話が生れる。

更に、仏典外のインド聖典ラマヤーナの「大地から生れ、又大地に帰って行く」シーターの物語。そして、ナナ、即ちイシュタルの死復活の神話も、又、ミトラス教をはじめ、西アジア全域にひろがっている諸々の遺跡や遺物は、大地の「生命力」とのかかわりを示しているといえる。万物がこの大地で生れ育ち、そして死んで行く。然も春になると、大地から万物が萌え出するように、我々の生命も一回性のものではなく、死も復活再生し、久遠に生きたという願望。これこそ、いろいろな神話を生み、諸々の文芸芸術を作り、且つ又、多種の建造物を作って来た。これらが法華経に凝縮されている。

かく考えて来ると、法華経の「地涌」の問題は、インドから西アジア、そしてギリシャにまで関連をもち、まさに世界的な規模をもっているものと思う。法華経こそ人類文化の凝結、普遍的綜合文化と言い得るものであると確信する。

〔註〕

- (1) 棲神五十六号（昭和五十九年）
- (2) Thomas, Hindu Religion, Custom and manners
- (3) 講談社オリエントの諸國110頁
- (4) Kusana Studies B. N. S. Yadava Some Aspect of the Changing order in India During The Saka-Kugana Age.
- (5) Hallade. The Gandhara Style and The Evolution of Buddhist Art
- (6) 法華經とインッ哲学（山口恵照氏）初期大乘教典に現れる蓮華生・蓮華座（塚本慈祥）法華經の思想と基盤
- (7) ラーナーナの英訳本 The Ramayana of Valmaki (Translated from the original sanskrit by makhan—by Lal Sen 四四頁)
- (8) 前掲書五五—五五三頁
- (9) 前掲書六六九頁「地涌」の表現あり
- (10) 前掲書六六九頁
- (11) 棲神（五十六年）静谷氏、碑銘目錄及び筆者の「小乗の中の大乗」
- (12) Rosenfield. The Dynastic Arts of The Kushan
 II Kanishka, Legends and Imperium
 III Huvishka and The Kushan Pantheon
- (13) アルダシール一世敍任式図浮彫3世紀ナクシェ・イールスタム・イラン神が王に王權のしるしのリボンやリングを与える。
- (14) Michael Michiver The Ancient and Classical World
- (15) B. N. Mukherjee, Nana on Lion
- (16) 井本英一 死と再生—ユーラシアの信仰と習俗九一頁
 筑摩書房 古代オリエント集（五味享氏・矢島文夫氏）
- (17) 井本氏前掲書二〇三頁及びフェルマースレン著ミトラス教（山本書房）
- (18) 大唐西域記卷三・一・二

(19) 大唐西域記

(20) Rosenfield 前掲書 II Kanishka III Huvishka

B. N. Mukherjee Nana on Lion—Kushan Coins of the land of the five river—

從地涌出 (高橋)